

天保凶録

下

松本清張

朝日新聞社

天保図録
● 下 ●
松本清張

天保図録（下巻）

昭和四〇年七月一五日第一刷

定価 四二〇円

著者 松本清張

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 図書印刷

製本所 清美堂製本

発行所 朝日新聞社
東京 北九州
大阪 名古屋

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

天保図録
(下巻)
目次

檻 の 賢 者	秋 の 蠅	駟 引	駒 込 の 里	野 の 狐	伝之丞殺し	口走った一句	狐 狸
178	154	131	101	77	53	30	7

風 立 つ 208

雨 中 検 分 236

流 水 客 土 258

耀蔵の「正論」 279

換 え 馬 300

一 網 打 尽 321

弘 化 の 春 343

あ と が き

松 本 清 張

装幀 伊藤憲治

天保
凶
録
（下卷）

狐 狸

狐 狸

大和田村と平戸村の中ほどに小高い丘がある。その上に、木柵をめぐらし、付近の枝ぶりのよい樹木や石を周囲に配置した陣屋ができてゐる。これが房総一帯の代官篠田藤四郎の現地駐在所だ。関東八州の行政は江戸馬喰町にある郡代屋敷で管掌した（関東郡代は勘定奉行兼職）が、今度の印旛沼開墾工事はその特殊性を重視して陣屋を現地に置き、直接に監督に当ることにしたので。代官篠田は勘定奉行梶野土佐守の配下で勘定組頭である。

昨夜大和田の宿に一泊した本庄茂平次は、翌る日の夕方近くまで工事場をひとりで見回り、七ツごろにこの陣屋を訪れた。

手代が茂平次の来訪を代官に知らせると、鄭重に、という言葉があつたらしく、茂平次は広い座敷に通された。蓑盆が出る、茶菓が出る、下にもおかぬ歓待だ。

待っている間、茂平次が座敷から下のほうを眺めると、一筋の川に人夫たちが群がっている。水車に足踏みして排水する者、杭を打つ者、畚で土を運ぶ者、その土を川岸に盛上げる者、などの動きに、合図する役人の声、人夫頭の喚き、杭打ちの音などが頼い雑音となつて聞えている。午後四時過ぎだといへば、まだ夏の陽の盛りだが、烈日のものとで働いている人夫たちの姿を見ると、こちらの呼吸まで暑くなってくる。

しかし、ここに坐っているぶんには別天地だ。深い廂は座敷にひんやりとした影をつくり、下から吹き上げてくる風が簾を絶えず翻していた。

「お待たせしました」

と、ようやく出て来たのが大兵肥満の男で、着ている白麻の下に突出た腹は波打って見えそうだった。根い顔に汗を滲ませ、息づかいが犬のように激しい。これが代官篠田藤四郎であつた。

「これはこれは、初めてお目にかかります。わたしは鳥居甲斐守の用人本庄茂平次という者、以後お見知りおきを願います」

茂平次は滑らかに挨拶を述べたが、二十二、三貫はあると思われる藤四郎にくらべ、小男の彼はまるで子供が坐っているようだった。

「それは暑い最中にご苦勞です」

藤四郎が団扇を忙しく動かす。顔をにこにこ笑わせてまことに愛嬌がよい。

「こちらにはいつお着きで？」

「昨日参りましたが、昨夜は大和田に泊りましてな」

「おう、それは。前もってお知らせ願えば、よいお宿に入っていただき、お近づきの盃でも差上げたかったのですが」

「いや、ご好意はかたじけのうございますが、なにぶん、てまえ主人鳥居甲斐守よりの言いつけがございまして、まず役目のほうを先に済ましました」

藤田藤四郎は怪訝な眼つきになって、団扇をびたりと懐の前で止めた。

「おう。では、あなたは鳥居殿からわたしへのお言づけを持って来られたのではないのです？」

「左様。主人甲斐守からは、工事の進捗具合を一応見て帰ってくるようにと申付かりました。いや、本来なら手前もこちらにお邪魔するつもりはなかったのですが、当地に來た以上は、やはりおてまえに敬意を表したいと存じましてな」

「はあ、それはようこそ」

藤四郎は笑顔でうなずいたが、今度は、その眼もとに微かな懸念の色が出た。

「本庄氏、では、今日はずっと工事場を歩いてご覧になられたわけですか。それにしても一口てまえのほうにご連絡があれば、誰とは言わず、てまえが直々にご案内いたしたものを……」

「いや、いや、おてまえも御用繁多なお身体。それに主人甲斐守からの言いつけもあって、ひとりて歩いたほうが勝手なところを自由に見られてよく納得できまする」

鳥居耀藏の名前をしきりと出して、その權威をふりかざす一方、自分の報告次第ではおまえさまの印象も違うぞと

「う謎を茂平次は匂わせたのだ。果して藤四郎の表情が少し変った。」

「いや、そうでなくてはなりませんまい。さすがは鳥居殿の御用人だけあって心得られたもので。ところで、本庄氏が見られた普請場のご感想はどうでございますな？」

「左様」

と、茂平次が言いかけたときに、家来たちの手で酒と鯉のあらい、冷し豆腐などが運ばれて来た。

「こういう場所です。何も無いが、まずは暑氣払いです」

「こんなことをされては困りますな」

茂平次は膳の上を見渡した。

「なんの。いづれ陽が落ちて涼しくなれば、しかるべき場所にご案内して改めて席を設けるようにいたしますが、これはまあお茶がわりです。その鯉もその川で生け捕りにしたばかりで、冷たい井戸水で料理させました」

「ご造作をかけて申訳ない」

「で、今のお話だが、工事場をご覧になってのご感想をぜひお聞かせ願いたいのですな」

「されば……大変な工事。この一語に尽きるようです」

「なるほど」

「てまえは大和田村から、その先の平戸村までずっと歩きました。予想以上の難工事と思いました」

「左様。それでわれわれも難儀しています」

「てまえが見て回ったところでも、暑さのためか人夫は目まいしてばたばたと倒れ、仕事も捗らぬようでは？」

「仕事が捗らぬのは、この辺の土が特別なもののゆえすぐに崩れるからです。いま、いろいろと工法を変えてやっています。たとえば、土手が崩れるのは地盤が柔らかいからと考え、堤防に竹を植えたり、杭を三段にも打ったり、腐心しております」

「篠田殿に伺いますが、この調子で果して期限通りに工事が間に合いますかな？」

「出来ます」

と、藤四郎は幼児のように二重にくくれた顎を、ふくれた胸に大きく引いた。

「この篠田藤四郎、一たんお受けをしてこの大役に就いたからには、必ず間に合わせてご覧に入れます」

工事は十カ月の完成予定である。ところが、着手以来すでに二カ月近くなっているが、どこの普請場も一向に仕事が進んでいない。大体、今度の工事は花鳥村の切通しは別として、天明度の開鑿跡を掘返すのが大部分なので、一名「印旛沼古堀普請」とも呼んだくらいだ。しかし、古く掘った跡はあっても、兩岸の軟土が川床を埋めているので、新規に掘るのと少しも変りはない。のみならず、この地方特有の黒い化土層は、人間の努力を喰うように、せつかく掘下げた地点を一晚のうちに埋没してしまふ。

この軟土層の崩壊を食い止めるために兩岸に竹を植えることが発案されたが、これが地下に根を張るには一年以上もかかるわけで、さし当てる工事の役には立たない。普通の堤防だと、岸沿いに杭を無数に打ち、石を詰めた蛇籠をその間に挿めば、まず崖崩れは防げるのだが、ここの軟土層はそういう護岸工事などでんで受付けない。杭も蛇籠も一夜で崩れた土の下に隠れてしまっている。

それでも天気の良いときは少しはましだが、一たん雨が降り出せば、増水によって工事は休止となる。利根川の水が印旛沼の水位を上げさせ、それがこの花見川の兩岸に

溢水を起す。また降雨のあとでは普請もさらに困難となるので、そのぶんだけ崩壊が一そう激しくなる。

篠田藤四郎があと八カ月しかない予定工事完成期間を何んのためらいもなく大丈夫だと茂平次に言明した心底には、その成算があったからではなく、この工事の功によって彼が水野越前守や鳥居甲斐守に取入り、立身出世をした下心があるからだった。

工事完成の見通しは全く絶望的であつた。その絶望感には、勢い込んで工事開始した一カ月後にすでに藤四郎の自覚するところとなつてゐる。

では、彼の落ちついてゐる態度はどこから来ている自信なのか。

藤四郎は、当面を糊塗してあとは賄賂で鳥居を瞞着しようとする肚なのである。相当な賄賂を彼に贈れば何んとかになると考え、適当な時期に代官交替を申入れ、次の昇進を狙つてゐる。つまり、一段上位者になることによって現場の責任を脱がれ、あとの失敗は引継いだ後任者の責にしようというつもりだ。

篠田藤四郎が鳥居甲斐守を賄賂で容易に懐柔できると考

えたのは、甲斐守耀蔵と金座の後藤三右衛門との関係からである。この二人の腐れ縁は、公儀の勘定方なら誰一人として知らぬ者もない公然の秘密になっている。

たとえば、今度の堀割工事に後藤三右衛門へ手伝金を割当てようという議が起ったとき、鳥居耀蔵は、

「三右衛門もこれまでたびたびお手伝いをしてるから、そうそうは金は持っていない。自分は彼の内情をよく知っているが、いま、それを賦課するのは過酷である」と

と言って後藤の献金の議を斥けた。

そのとばかりが大阪の商人に降りかかって、三井、鴻池などの冥加金割当となつたのだが、これなど日ごろから三右衛門に賄賂を貰っている耀蔵の姿をはつきりと見せている。

また、こういうこともあった。

今年（天保十四年）の六月五日から神田明神の祭があつた。このとき耀蔵の末子で宝次という六歳になる幼児が祭礼を見たいというので、後藤三右衛門は山車が通る沿道に棧敷を設けさせ、宝次に見物させた。

これが役人の間で問題となつた。なぜなら、質素儉約令

はすべての華美を一切禁止している。賑かな棧敷を設けて、踊り屋台など洩らさず所望したとは上覧所でもないやり方だ。三右衛門は町年寄や、氏子総代、鳶の者などに金をばら撒き、宝次には町与力までが付添つたという。

こともあろうに、儉約の元締である町奉行の鳥居甲斐守がわが子にそんな真似をさせたのだから問題にならぬはずはない。ある人が、これを耀蔵に質したところ、

「たしかに子供は祭礼見物に後藤のもとにやつたが、何ぶん幼児であるから屋台を見物したいというのは無理からぬことだし、また後藤とは旧知であるから、混雑を避けた見やすい場所に子供を坐させたのは友情であらう。もとより、賞むべき行為ではないが、取立てて咎めることもあるまい。そんなことを問題にするのは、何か三右衛門に恨みを持つている者がことさらに言触らしているのではないか」

と逆に激しく反問したという。

一説によると、三右衛門の妾の一人が耀蔵の子を連れ出して、その見物席に坐つたとも言われている。いずれにしても、いかに日ごろから三右衛門が金をもって耀蔵を籠絡

しているかが分つて、兩人の間の根の深いのに諸人いまさ
らのように呆れた。

こんなことも篠田藤四郎には分っている。鳥居への賄賂
政策で、おのれにふりかかっている難局が乗切れると信じ
ているのはそこだ。

もともと篠田藤四郎は、当初、この工事を引受けること
が出世の機会だと思ひ、みずから運動して買つて出たくら
いだ。ところが、いざやってみると、案に相違して手がつ
けられない難場と分つた。お手伝いと称する賦役割当の各
藩からも続々と彼のもとに苦情がくる。

いずれの藩も、こんな割の合わない工事を命じられて渋
い顔になっている。だが、その不満を水野越前守などの前
には表向き言うことができないから、何段にも身分の低い
篠田藤四郎に忿懣が向けられる。各藩とも、苦しい金を注
ぎ込んだ上に土氣は揚がらない。連れて来た人夫たちは足
もとを見て賃銀値上げを迫る。逃亡者も出る。日射病のた
めに病人は続出する。なかには過酷な労働を嫌つてニセ病
人も出る。しかも、賽の河原の石を積み上げるように掘つ
ても掘つても自然の暴力が次々とその努力を打崩してゆく

から、いつになったらこの艱苦から解放されるのかメドが
立たない。

だが、藤四郎も一介の代官にすぎぬ。鳥居に賄賂を使う
からには莫大な金が必要だが、それを彼はどこから入手し
ているのか、この辺のところは、たつた今着いたばかりの
茂平次に分るはずはなかった。

藤四郎もまた本庄茂平次がどのような人物かは知ってい
ない。彼はただ鳥居耀蔵の使いとして現地視察に来た普通
の用人と思つてゐる。だから、この男、適当にもてなし、
飲ませ、食わせ、抱かせて江戸に帰せば、耀蔵に適当に報
告をしてくれると思つてゐる。

この辺は、中央から視察にくる本省官僚を饗応して、腫
れものにさわるようにそつとお帰りを願う地方役人や業者
のやり方と似ている。

ようやく日が昏れた。下の普請場は夜番小屋の火がある
だけで、星空の下の闇に溶けた。向うの丘陵の裾、こちら
の林の中に建っている人夫小屋の明りが、暗い海に浮んだ
漁火のように点々と見える。

「ようやく凌ぎやすくなつて参りましたな」

と、外出着になつた篠田藤四郎が座敷に現れた。

「本庄氏、これから花島観音に普請無事落成の祈願に詣ろうと思います。あなたもぜひございして下され」

「ほう、観音堂に？」

「左様。ここより半里ばかり南に靈驗あらたかな観音がおわしましてな。いや、土地の者も今度の難工事を見て、やれ、土が崩れるのは花見川の底に巢食っている白蛇の妖精が邪魔をしているの、やれ弁財天の祟りだの、取止めのないことを申しております。そのため無知な人夫どもの中にも怖れを抱く者も出て参りましたな。こういうことはもとより迷信ですが、いちがいに叱りつけて抑えてばかりはおられませぬ。よけいに彼らの氣持を萎縮させますので、少少ばかばかしいとは思つても、人夫どもの氣持を和めるためには観音堂に詣っております」

「なるほど、孔子も道によつて賢しと申されたが、人を使うからにはいろいろな方便も必要でしような。しかし、篠田殿、観音堂に夜詣りとはちと解せませぬが」

「はっははは」

と、藤四郎は太い腹をゆすつて笑つた。

「この観音は夜でのうては御利益がうすうござる」

「はて、それはまたどうしたことで？」

「いやいや、本庄氏、とにかく一しよにおいでなされ」

藤四郎の口吻では観音の夜詣りはどうやら口実らしいと茂平次も気づいた。着いたときも改めて席を設けると言つたから、観音は観音でも生き観音の謎であらう。だが、この辺の色の黒い百姓女の首を見てもはじまらぬ。しかし、まあ、どんな雁首が揃っているか、これも旅先の一興だと、茂平次はうす笑いしながら駕籠の中に揺られていた。

飯場の前を通ると、まだ人夫たちの騒ぎ声が聞えている。彼らも酒を呑み、故郷の唄などうたつていた。殊に庄内の盆唄は哀調がある。夜の野面を渡る風に乗った音頭を聞いていると、こちらまでしみじみとなる。

「路が悪うございますので」

と、駕籠の外から代官手付の者が詫るように言つた通り、茂平次は小半刻も小舟のように揺られて、ようやく降りされたのが今までの殺風景な夜景とは打つて變つた賑かな茶屋の前だった。

駕籠から外に出ると、前の駕籠から降りた藤四郎が近づいて来て、

「本庄氏、花鳥観音というのはあれでござる」

と、暗い中から石段を指した。夜目にもその小高い森に仁王門らしいものが見える。

「ははあ、なるほど、神々しいものですね」

茂平次が愛嬌を言うのと、

「いや、神々しいのはこちらで」

と、くると背中を回したのが赤提灯をずらりと軒に吊った茶屋で、「角屋」と大きな看板が出ている入口だ。亭主は羽織に威儀を正し、女中、雇人どもも門口にずらりと並んでの出迎えである。

「これは、代官さま、おいでなされませ。毎度ありがとうございます」

亭主はつづけて頭を下げた。

「うむ。亭主、今宵はほかに客は無いであらうな？」

「へえ、そりやもう代官さまのお越しだというお報らせを御家来衆から受けましたので、宵の口から客止めをし、御入来をお待ちしております」

「今宵は江戸から大切なお客さまを御案内して来た。粗相のないようにいたせ」

「それはありがとうございます、旦那さま」

「おう、おかみか。また世話になるぞ」

「恐れ入ります」

「本庄氏、では、どうぞ」

と、藤四郎が言ったが、その本庄氏という名前を耳にした女一人が、赤提灯の灯影からふいと顔を上げた。

本庄茂平次は代官篠田藤四郎と並んで、角屋の二階座敷の床の間を背にして坐った。急造りの茶屋だから広くはない。それでも間の襖を取払い、三間ほどぶち抜いたが、代官所の手付、手代、書役たちが藤四郎の供で六、七人も並び、その間に女中が挟まっつての、総がかりの奉仕だから狭いくらいだ。今夜はほかの客を断り、亭主も代官には最大の奉仕ぶりだった。

「本庄氏」と、藤四郎は並んでいる女たちに眼を向け、

「草深い田舎のことゆえ、江戸から見えたばかりのあなたには、さぞかし狸のような女に見えましようが、これで結